

## <楽器紹介> ～チェンバロ編～

### チェンバロは人間機械!?

「チェンバロ」というと、古の典雅な響きを奏でてくれる優美な楽器、と想像されるかもしれませんが。でも今回はこれまであまり語られてこなかった「チェンバロ」の一面に焦点をあて、だからこそこの公演に必要な理由をご紹介します。



チェンバロの歴史は、最も古くは15世紀の文献にその記述が見られるものの、現存する楽器はありません。16世紀からイタリア各地でチェンバロが大量に製造されるようになると、17世紀にはフランドル地域(現オランダ、ベルギー)でもチェンバロ製造が盛んになっていき、18世紀についに、チェンバロ音楽や楽器成立の黄金期を迎えます。

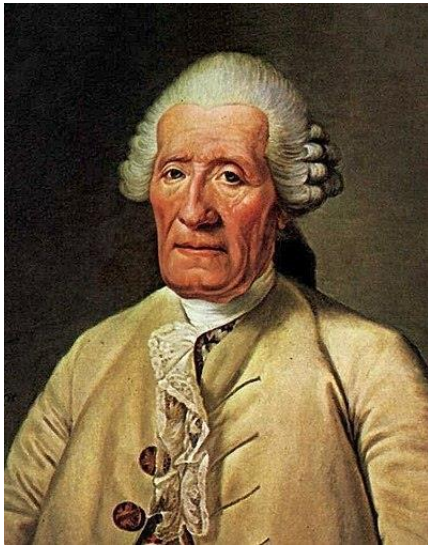
そんな黄金期を迎えた18世紀のフランスでは、医師で哲学者でもあったジュリアン・オフレ・ド・ラ・メトリーが1747年に発表した『人間機械論』(人間の心の動きも肉体の動きも物理的に分析でき、人間は一種の自動機械であるという考え)がセンセーションを巻き起こすなど、「人間と動物、人間と機械の境界」についての話題が、当時の多くの人々の関心を集めていました。

これより100年以上前の近代科学が誕生した17世紀には、「我思う、ゆえに我あり」で有名な哲学者、ルネ・デカルトが『方法序説』(1637年刊)で動物機械論(時計などの機械は部品の組み合わせで規則的な動きをするが、動物も同様に自然が与えた部品の組み合わせによって機械的な行動をとるという考え)を発表。以来、「人間と動物、人間と機械の境界」についての議論は、哲学者、研究者、教育者、技術者、芸術家など、様々な分野の人々を巻き込んで実に世紀を超える壮大なテーマとなって語られてきました。

### <音楽がもたらしたコンピュータの発明>

動物や人間の動きを模倣した機械が作り出せると考えたデカルトの主張は、デカルトが『方法序説』を出版してから100年後の1738年、フランスの機械技術師ジャック・ド・ヴォカンソンによって実現されます。解剖学を学んだヴォカンソンは血液循環、呼吸、消化といった生命体の機能を真似た機械装置を次々に開発していきます。

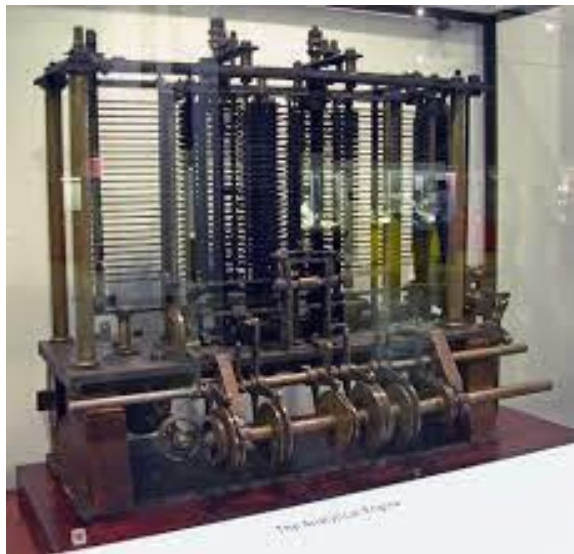
1738年には「フルート奏者」のアンドロイド(自動人形)を製作し、発表当時から多くの関心を得ました。ヨーロッパを興行し、様々な書物でも取り上げられ、フランスの王立科学アカデミーに『自動人形フルート奏者のメカニズム』と題する論文を提出して、その功績を讃えられて一躍名声を得ることになります。



ヴォカンソンの製作した自動人形の「フルート奏者」は、円筒形のシリンダーの表面に打ち込まれたピンの配置によってプログラミングされて、笛と太鼓を演奏でき、なんと12曲ものレパートリーがありました。

生身の演奏家と同じくらいあまりにリアルに演奏できる自動人形を前に、「機械は正確に演奏できるが、しかし、機械は魂を持たないとい

う点で、決して人間と同等でない」とする人間の優越性を主張する議論が巻き起こるなど、ヴォカンソンの製作した自動人形は時代を揺るがす革新的な存在となりました。



ヴォカンソンはのちに、この円筒形のシリンダーの表面に打ち込まれたプログラミングを自動織機に応用します。当時は職人たちの猛反対に遭い、自動化の実現には至りませんでした。その後フランスの発明家ジョゼフ・マリー・ジャカルに発見されて1801年について実用化されました。その後、自動織機を参考にしたイギリスの数学者チャールズ・バベッジが「解析機関」を考案します。「解析機関」は最初の機械式計算機であり、コンピュータの先駆けでした。

このように現代のコンピュータの発明には一見全く関係のないようなアイデアやテクノロジーが隠れていたりします。「人間と動物、人間と機械の境界を越えるか」当時の人々を魅了したこの壮大なテーマは、現代を生きる私たちのテーマでもあります。過去の偉大なテクノロジーから、パフォーマンスを通じて私たちはどのような「答え」を出すのか、ぜひ会場で体感して下さい。